

マヌエル・シュラスケリア (高輪店)

2007年7月23日

峰 万里恵 (うた)

飯泉 昌宏 (ポルトガル・ギター)

高場 将美 (ギター)

FADO LIVE

●リスボンのお祭り
広場の壇上に飾られた
マンジェリーコ(バジリコ)と
カーネーション
——愛の詩を添えて



voz: Marie Mine
guitarra: Masahiro Iizumi
viola: Masami Takaba

23 de Julho, 2007
MANUEL CHURRASCARIA

I

1. ポルトガルの家 *Uma casa portuguesa*

(詞: V・デ・マトシュ / R・フェレイラ 曲: A・ヴァシュ)

ポルトガルの家にはよく似合う、パンとワインのあるテーブル。おずおずとドアをノックした人が、みんなと同じテーブルにつく。石灰の白壁、ローズマリーの薫り。金色のブドウひと房、庭には2輪のバラ。タイルの聖ヨセフ様、それに加えて春の太陽。たくさんのキスの約束と、わたしを待っている両腕。そんな場所はポルトガルの家しかない。そこはきっとポルトガルの家だ！

2. ちっちゃなマウムケール *Malmequer pequenino*

(民謡: アマリア・ロドリゲス編 作曲: R・ボルジェシュ・デ・ソウザ)

ちっちゃなマウムケール(=マリゴールド=金盞花)が、きれいなバラに言いました。「女王様に選ばれたからといって、そんなにいばっていることはないでしょ」 / 風が揺らすポピーの花、あんたたちを見ていると飽きない。自分でも知らず、素朴なままでいられるということの美しさ！ / あの女は罪を犯し、愛ゆえにファドをうたうようになった。ファドが彼女をあんまり遠くまで連れて行ったので、神様も彼女を見失ってしまった。

3. つめたい明るさ *Fria claridade*

(詩: P・オーメン・デ・メロ 作曲: J・マルケシュ・デ・アマラウ)

あんなに悲しかったあの日、明るさにまわりを囲まれて、ととてもとても大きかった街——そのとき、通り過ぎたふたつの美しい目。わたしは夢を見ているのだと思った。……目を覚ましたわたしに、あの明るさは、もっと冷たく感じられた。とてもとても大きかった街。わたしを知る人は、ひとりもいなかった。

4. 貧しいことは不幸ではない *Não é desgraça ser pobre*

(詞: ノルベルト・デ・アラウージョ 曲: 《ファド・メノール・ド・ポルト》)

貧しいことは、頭がおかしいことは不幸ではない。不幸なのはファド(=宿命の歌)をもってきたこと。貧しさはわたしたちを殺さないから、貧しいのは不幸ではない。頭がおかしい女はなにも感じないから、頭がおかしいのは不幸ではない。不幸なのは、歩きまわって、声もかされるほどうたいすぎる。そしてファドをかたくなに持ちつづけること、心の中に、声の中に。

5. わたしの愛は海の男 *Meu amor é marinheiro*

(詞: マヌエウ・アレグレ 曲: アライン・オウルマン)

わたしの「愛」は大海原に住んでいる。「愛」がわたしのそばにやってくると、わたしの血は1本の川になる。わたしの「愛」は遠くで船たちと生きている。いつの日か帰ってくる、わたしたちの川の流れに。わたしの「愛」は海の男、自由に生まれた心を、くさりにつなぐことはできない。

6. ポルトガルの船乗り *O marujo português*

(詞：リニャーレシュ・バルボーザ 曲：アルトゥール・リベイロ)

ポルトガルの船乗りが通るとき、歩かずに、踊りながらゆく。派手な身振り、なにかたくらんでいる目つき、ベレエ帽のかぶりかたも、ねじけてる。でも彼が発明する愛撫から、逃げられる女性はいない。ポルトガルの船乗りが通るとき、それは海が通ってゆくこと。人をおびやかす、愛情たっぷりの満ち潮。

7. 黒い船〔暗いはしけ〕 *Barco negro*

(詞：D・モウラオン・フェレイラ 曲：カコ・ヴェリョ / ピラチーニ)

砂浜で目を覚ましたわたしは、みにくい顔に見えるのが怖かった。でもあなたの目は、そうではないと言っていた。わたしの心に、太陽が射しこんだ。……わたしは見た。あなたの黒い船は光のなかで踊っていた。嵐に飛ばされそうな帆のあいだで、振られていたあなたの両腕。……浜の老女たちは、あなたは帰ってこないという。頭がおかしいんだ！……窓ガラスに砂をぶつける風のなかに、うたっている水のなかに、くすぶっている火のなかに、寝台のぬくもりのなかに、わたしの胸のなかに——あなたはいつもいっしょにいる。わたしのまわりのすべてがそう言う、あなたはまだ出航もしていないと。

II

1. アイ・モウラリア *Ai Mouraria*

(詞：アマデウ・ド・ヴァレ 曲：フレデリコ・ヴァレーリオ)

モウラリアの街で出会ったファド歌いの男——浅黒い顔、人をからかうような目つき。嘘つきだった、でもわたしは彼の魔法にかけられた。風が悲しい歌のように運んでいった愛。でも、いまでも、どんなときも、わたしはその愛をもちつづけている。 / 軒下でナイチンゲールの鳴くモウラリア。あゝ過ぎてゆく聖体行列。懐かしい歌い女の声、すすり泣くギターラのなかで。

2. ファド・メノール “わたしの両目は2本のろうそく”

Fado menor “Os meus olhos são dois círios”

(詞：リニャーレシュ・バルボーザ 曲：《ファド・メノール》)

わたしの両目は2本のろうそく、わたしの顔を悲しく照らす。アンジェラスの鐘が聞こえるとき、午後が行ってしまうとき、わたしはあなたの、人を思う心に願う、わたしのために祈ってくださいと。でもあなたは、わたしを絶望させる、高い空の雲たちのように。毎日わたしは待つ。毎日あなたは来ない。

3. 川辺の民 *Povo que lavas no rio*

(詩：P・オーメン・デ・メロ 曲：ジョアキン・カンポシュ)

わたしは、みんなの丸いテーブルで食べた。古い深鍋から、人々の手から手へと渡されてきた接吻を飲んだ。わたしがもらったワイン、澄み切った水、野性の果実。だが人々の命はもらえなかった。 / 川で洗う人々よ、

わたしの棺にする板を、手斧でけずりだす者よ、おまえに味方する人はいるかもしれない。おまえの聖なる土地を買うものは出てくるかもしれない。だがおまえの命は、だれのものにもならない。

4. 真夜中とギターラ *Meia-noite e uma guitarra*

(詞&曲：A・ドウアルテ・シモンエシュ)

夜はなかば、ギターラがひとつ。生きてゆかなければならない人生もなかば。そして、ひとりの女の歌につれて、離れられなくなる孤独の追想。 / ギターラは悲しく忘れられて、だれもその語っていることをわからない。人生のなかばに、夜はなかば。わたしをわかってくれる人もなく。

5. このおかしい人生 *Estranha forma de vida*

(詞：アマリア・ロドリゲス 曲：アルフレード・マルスネイロ)

神様の意思だった。わたしがこんなに悩みにもだえて生きているのは。このわたしの心は、失われた命で生きている。 / なんとこのおかしい生きかた！ 心臓よ、止まれ。どこへ行くかもわからず、なぜ執念ぶかく走りつづけるのだ？ わたしはもう、おまえにはついて行かない。

6. 涙 *Lágrima*

(詞：アマリア・ロドリゲス 曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ)

なやみにあふれて、わたしは横たわり、さらに増えたなやみとともに目覚める。わたしは、あなたがきらいと言う。そして夜には、あなたの夢を見る。 / いつの日か、死ぬことをさとったら、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしはショールを地に広げよう。そしてそのまま、まどろんでいこう。 / もし死んだら、あなたがわたしのことを泣いてくれるとわかったら、あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てることだろう。

7. 聖アントニオの夜 *Noite de Santo António*

(詞：ノルベルト・デ・アラウージョ 曲：ラウウ・フェラオン)

マルシャ(行進曲風のダンス)を踊りに行きましょう。ごちゃごちゃ言わないで！ 愛に関しては先のことを考えちゃダメ。古いダンスパーティ広場は廃止になった。マンジェリーコ(バジリコ)の薫る祭壇もない。でも、みんなここへ来る。 / リスボンはいつも恋多き女。もう恋人たちの行列ができた。ごちゃごちゃ言わないで！ 愛するのは運命、うたうのは天から与えられた力。ひとつの歌は1枚の水彩画。1輪の開いたカーネーションが窓からのぞく。腕を貸して！ さあいっしょに踊りましょう。 / 聖アントニオの夜(6月13日)、アーティチョークの花が開けば恋が実り、花火が爆発。街々がうたうあいだは、イワシを焼く屋台が並ぶあいだは、聖アントニオの夜があるかぎり、リスボンはもう死ぬことがない。……またお会いできるのを楽しみにしております……

出演者 / マヌエル・シュラスケリア 一同